

# ゆとりある教育を求め 全国の教育条件を 調べる会 ニュース

2014.9.28発行

NO.37

総会と夏研の報告

新聞を読んで(乞う議論)

## 第6回義務教育条件整備法制研究会、

第9年次総会を名古屋において開催しました。

とき 8月7日(木)8日(金)

ところ 名古屋国鉄会館

第6回義務教育条件整備法制研究会の参加者は11名でした。研究会後、調べる会の第9年次総会が開催され、第8年次活動報告、会計報告、第9年次活動計画案、予算案の論議が行われてすべて承認されました。(詳細は2~3頁)

## 第45回全国臨時教職員問題学流交流集会IN

静岡が開かれ、山崎事務局長がレポート「非正規・再任用教職員はなぜ増やされているのか」を提出しました。(2014,8,9~11)

全体会では、調べる会会員でもある山口正会長が基調報告し『教育法の現代的争点』日本教育法学会編(法律文化社)の橋口論文「義務教育諸学校における教職員の非正規化について」も引用して、臨時教職員問題の解決のためのとりくみを提起されました。

2014教育のつどいIN香川の分科会「教育条件確立の運動」で調べる会会員が2本のレポート報告を行いました(2014/8/16~18)

(参加者の感想を4頁に掲載)

これ以上働きつづけたら死ぬ...と思って  
仕事を辞めようと思っていたけれど...

## <8月17日夜 教育のつどい交流会>

調べる会入門講座「学級編制と教職員定数」をプレゼンテーションしたあと、参加者で意見交流しました。今まで開催してきた中で最多の16名の参加者で盛り上がりました。

地元四国から参加の方の中には、長時間過密労働を強いられ、「もう退職しようと思っていた」「病気特休をとった」と発言される方もおられ、「教職員を増やすにはどうしたらいいのか?」と切実に知りたがっている方ばかりでした。

感想の中で「昨日今日とつどいに参加して、辞めるのは止めようと思いました」と発言されたのには、ほっと安心するとともに、これからの私たちの調査研究の必要性をますます感じました。(山崎洋介)

## 総会 出欠のお便り

○地元で「山の上の小さな地域博物館」なるものを設立、加古川市の第2次大戦以降の教育現場の元気さとその変化を展示しています。その内容を考える時、「公教育の無償性を実現する」が大変役立っています。財政にいかにか引きずられているかよく分かります。お金持ちが金儲けにより国の金を使いたい様子も分かりました。ありがとうございました。(K)

## 出欠のお便り(つづき)

○県内では、小学校1、2年生、中学校1年生が35人学級になっています。3年前から、主幹教諭の導入があり、小中学校に35名配置です。  
(岐阜市 N)

○8月23日開催の日本教育学会第73回大会(九州大学)におけるテーマ別発表「B 8戦後日本の教育財政構造 歴史・比較・理論」で本会の石井、田中、井深が発表します。(井深雄二)  
○ホームページを  
毎日一回は見ましよう!  
(徳島県 I)

## お知らせ

日本教育法学会  
『現代教育法の争点』

定価3800円の所

調べる会価格3370円

80項目にわたる争点の解説です。どの項も、4頁、6頁で簡潔に書かれていますので、入門書に最適です。

**第6回義務教育条件整備法制研究会** 報告内容と報告者は以下のとおりでした。

- 「調べる会入門講座 初級編」の提案  
山崎洋介（奈良市教員）
- 「長野県の教職員定数の謎を解く その 」  
高木義隆（長野県教組教育財政部長）
- 「人間の壁・佐賀教職員組合事件の教育財政政策史的検討 - 義務標準法成立史の一論点 - 」  
井深雄二（奈良教育大教授）
- 「愛知県の終戦時・占領下における女性教員の養成の状況 - 元教師 A さんのインタビューから - 」
- 「通信教育・大学夜間部による女性教員の養成 - 女性教師のインタビューから - 」  
鈴木つや子（愛知県元小中教員）
- 「戦後教育改革期における新制高等学校教育条件整備法制の研究  
- 高等学校設置基準（1948）の制定過程とそれを保障する財政措置の構想に着目して」  
村田峻一（名古屋大学）
- 「少人数学級の運動と現局面の課題 - 学力調査結果を利用した少人数学級否定論  
子ども一人当たりで計算する教職員削減論・・・ふたつの論理を検証する - 」  
橋口幽美（宮崎県元小中事務職員）
- 「非正規・再任用教職員はなぜ増やされているのか」  
山崎洋介(奈良市教員)

「調べる会入門講座 初級編」のパワーポイントを印刷したものを同封しました。ご質問・ご意見等、お寄せ下さい。  
DVD希望の方は、ご連絡ください。

**会費納入のお願い**

会計 今福志枝

今年度（2014年8月～2015年7月）分の会費の納入をお願いいたします。

なお、前年度の会費として納入される場合は、その旨を書き添えてください。前年度の公文書CDをお送りいたします。（CD不要の場合は、今年度会費のみで結構です。）

正会員 年間5000円

賛助会員 年間2000円

学生会員 年間1000円

振替郵便口座 名前 **全国の教育条件を調べる会**  
記号・番号 **01750-5-132608**

（申し訳ありませんが、振込手数料のご負担をお願いいたします。）

## 教育条件法制研究会（夏研）の感想

### 台風が迫る中での研究会 鈴木つや子

大勢の参会者に恵まれ、有意義な会でした。報告レポートの本数も多く、頭がフル回転しました。総会では、多くの会員、特に役員の皆様に寄ることが大きいことを改めて認識いたしました。台風の中を急いで帰られた橋口さんを案じて散会しました。

鈴木は、「終戦時の愛知県の女性教員養成」について報告しました。このテーマでは、現在の問題を研究するのとは違い、一次資料の収集が課題となります。また、証言者の話も重要な資料となります。井深先生と小宮会長から、「終戦教育事務処理提要」(デジタル版)の存在を教えていただき、感謝しております。また、このテーマで報告の機会を与えていただき、さらに内容について検討していただき、感謝しております。再任用教員制度の実施状況についても、今後研究を続けてまいります。皆様の研究成果も取り入れていきます。

### 勉強になりました！！ 村田峻一

名古屋での研究会では、その時点での卒業論文の構想を発表致しました。当時はなかなか問題状況を整理しきれず、ちぐはぐな発表になってしまいましたが、ご指導頂きありがとうございました。また、義務教育費国庫負担制度などのあり方についての井深先生からのご意見に関しては、地方自治、住民自治の観点から考えれば、そのような構想もあり得るのだなと大変勉強になりました。

### 史上最多の参加者 山崎洋介

名古屋での研究会もはや6回目となりましたが、今回は史上最多の参加者で大いに盛り上がりました。とくに若手の研究者や教職員が参加していただき、共に論議ができたことを有意義に感じています。報告も、二日間の日程では消化しきれないほどの質と量で、報告と討議の時間が足りず、もったいないくらいでした。

私自身、調べる会の入門講座初級編を提案させていただき、みなさんに論議をしていただきました。これからは、これをもとにして会員が各地でプレゼンテーションしながら、調べる会の研究成果を発信していくことができたらいいなと思っています。

春(大阪)、夏(名古屋)、冬(東京周辺)と定着してきた研究会には、初めての参加者が必ずいらっしやいますから、議論の共通認識をつくるためにも、この初級編を冒頭に毎度提案しながらバージョンアップしていけたらと考えています。また、引き続き、中級編、上級編の提案もしていきたいと思っています。

全国のみなさんと一緒に酒を酌み交わしての交流は、大変楽しかったです。毎日、仕事にも運動にも全力で奮闘する多忙な中、研究を続けることは、とても難儀なことなのですが、次の研究会までに、研究をまとめてみなさんと討議をしたい、交流をしたいという気持ちが、私をまたパソコンに向かわせています。今度は冬に東京？埼玉？でお会いしましょう。

## 教育のつどいの感想

私は、教育条件確立の運動分科会に「非正規・再任用教職員はなぜ増やされているのか」を報告しました。つどいに先立ち、全国臨時教職員問題学習交流集会 in 静岡にも提案することができました。臨時教職員問題の解決のための研究と政策提起は、これからの主要な課題のひとつと考えています。私たちの提起が、これからどのように受けとめられていくのが楽しみです、いろいろな機会を通じて、積極的に発信していくつもりです。

分科会では、少人数学級実現など教育条件改善のためのとりくみの報告レポートが年々減ってきているのが残念に思います。署名など教育条件改善運動をとりくんでおられる市民団体や運動体などに、つどいへの参加を呼びかけて、ともに交流することを呼びかけていきたいです。(山崎洋介)

香川で行われた教育の集いでは、各分科会の資料収集をする中で、たまたま書道の分科会(第8分科会)に顔を出すことになりました。そこでは「左利きの子に対して、どのようなアプローチをするか」という発表から、出来ればみんな両利きにするほうが体幹の発達のバランスがいい、左利きの子が不利にならないための教室作り、学校づくりはどうすればいいといった話に発展してゆきました。28という沢山の分科会がありますが、それぞれの観点から教育条件整備や学校づくりについて議論がなされているように思います。分科会間の交流があると、より面白い議論になるかもしれないと思いました。(村田峻一)

初めて、県ごとの全体の非正規率の計算をして、グラフにしたので、それを見てもらいたいと思ってレポートを出しました。パワーポイントを初めて使ったので、ドキドキしました。「それだけでも偉い!」と共同研究者の久保富三夫先生から褒めていただきました。でも、内容は不十分でしたので、これからまだまだ調査が必要です。冬の研究会までには、深めておきたいと思います。(橋口幽美)

メール投稿

新聞を読んで・・・みなさんは、どうお考えでしょうか？

9月14日付け朝日新聞名古屋本社版 「教員採用 迫る下り坂」 を読んで

鈴木 つや子

朝日新聞が、日本教育社会学会における、広島大大学院教育学研究科の山崎博敏教授の発表をもとに書いた記事を掲載しました。副題は、「21年度から急減予測 養成見直し必至」です。一部引用します。

「公立小中学校の先生は、いまの大量採用から一転して狭き門になりそうだ。広島大大学院教育学研究科の山崎博敏教授によると、子どもの人口減少の影響を受け、採用は2021年度から急減し、25年度

には今より約5千人減の約1万7千人にまで落ち込むという。大学は教員養成の計画を見直し、定員を縮小するなど「冬の時代」への対応を迫られることになる。(中略)山崎教授の推計によると、退職教員が既に都市部で減り始める一方、公立小中学生も今の970万人から25年度は820万人へと少子化がさらに進むため、採用数も減る構図だという。・・・文部科学省は「一部の自治体で減少傾向が見られ、採用全体が縮小する流れにある」とみている。・・・山崎博敏教授は、「教員養成課程のある大学は経営戦略を、教委は採用計画を見直す必要に迫られるだろう。そのためにも国は長期的な推計を行い、全国各地のきめ細かな情報を把握することが重要である。」

以上です。まずは、山崎教授や文科省の言い分に注目します。新規採用教員需要を推計するにあって、都道府県教育委員会は、児童生徒数から計算した必要教員数から、その年の退職者数を引きます。単純なように見えますが、現制度の下では、そう単純ではありません。第一に、何人の定年退職者が再任用を希望するか、希望者の中、何人がフルタイムで、何人が短時間を希望するかなど、再任用教員に関することを勘案しなくてはなりません。最も早く情報をつかまなくてはならない事項です。第二に、何人の児童生徒数で一学級を構成するかの事項です。都道府県によって、国の基準と少し違う場合があります。第三に、教員のうち、何人を正規教員とするか、何人を非正規教員とするかです。このような予測をもとに、新規採用数を決定します。文科省が教育予算に総額裁量制を導入してから、教育委員会は、教員数、教員給与を自由に決めることができるようになりました。

山崎教授は、このような経過を経ずに、都道府県教育委員会が単純に必要な新規採用教員数を推計しているように報告しています。この山崎教授の報告は、9月13日に、松山市で開かれた日本教育社会学会でなされました。わたしは、山崎氏の過去の論文で、このことにふれた論文を探したが、見つかりませんでした。また、この報告を実際に聞いたわけではないので、この朝日新聞の記事に基づいて、批判を展開します。

児童生徒数が減ることはとっくにわかっていることで、それをわざわざ山崎教授が取り上げるのは、安倍政権の意向を酌んでいると、わたしは、解釈します。文科省は、これまで、少人数学級政策を推進し、教員定数を増やすことを目的として、教員養成学部(私立大学)の認可を増やしてきました。また、2010年から、小1の35人学級を実施して、次年度以降に小2以上に拡大する予定でした。しかし、自民党安倍政権になってからは、逆方向に向かっています。この報告は、生徒数の減少から、教員数が減るのは仕方がないと結論付けています。30人学級実現への国民の運動については全くふれていません。また、40人近い人数の学級に在籍する子どもをもつ保護者の声、「学級の児童数を減らしてほしい、きめ細かな教育をしてほしい」を、無視しています。問題は、この報告をそのまま載せた朝日新聞の姿勢です。読者は、この記事を読んで、「なるほど」と思ってしまう。わたしは、朝日新聞社と、文科省に次のように要求します。

朝日新聞社に対しては、この山崎教授の報告をそのまま載せるのではなく、さまざまな観点から記事を書くように要求します。文科省に対しては、これまで進めてきた少人数学級への取り組みを、さらに、強力に進めることを要求します。少子化に乗じて、新規教員数削減を画策するのではなく、少子化を好機として、少人数学級(少人数指導ではない)を中三まで拡大することを要求します。

# 特集紹介

「週刊東洋経済」9月20日号に、大特集として「学校が危ない」という記事が掲載されています。表紙には、「教育劣化は日本経済の大問題だ」との大見出し。36頁から82頁にわたる、実に46頁にもなる「大特集」です。見出しと図表の表題だけを、紹介します。

**学校が危ない** ( は図表 **○○○**は寄稿記事)

## 1 先生たちのSOS

ルポ 先生が辞めていく

先生のなり手が減っている - 教員採用試験の競争倍率 - (出所: 文部科学省)

ベテラン先生の大量退職がやってくる - 公立小中学校の年齢別教員数 - (出所: 文部科学省)

ルポ 燃え尽きる先生

日本の先生は忙しい - 1週間当たり平均仕事時間 (出所: OECD国際教員指導環境調査)

理想と現実のギャップは大きい - 小学校教師の悩み - (出所: NPO 法人日本標準教育研究所)

学校や教師の仕事は拡大し、多様化している - 学校・教師の役割のイメージ

(出所: 文部科学省)

増える非正規教師 - 公立小中学校の勤務形態別教師数 - (出所: 文部科学省)

階層化する先生 - 東京都の小中学校教師数 (注: 東京都資料により本誌算出)

ルポ ブラック化する職場

ルポ 多忙と疲労の果てに

高止まりする教師の精神疾患 (出所: 文部科学省)

**覆面座談会** 「教師は“24時間受付可能”と思われる」(小中教諭4名)

大公開 忙しい先生の「実像」と「本音」

**数字で見る**先生たちの基本データ

Q先生の月給は?

Q先生の数は?

Q女性の校長・教頭の割合は?

Q校長・教頭になる年齢は?

平均11時間、学校で働く - 小学校教師の一日 - (出所: NPO 法人日本標準教育研究所)

標準勤務時間(8時間30分)を超えて働く先生が大多数 - 小学校教師の勤務時間 - (出所同上)

学力世界上位でも低い先生の満足度

世界でも見劣りのする教育に対する公的支出 (図表3枚)

子どもの問題は一層複雑に

74%の親が小学校低学年から英語導入に賛成

低い満足度、自信のない日本の先生

**尾木直樹「北風だけじゃ耐えられない 教師には太陽政策が必要」**

## 2 変容する学力格差

2014年度全国学力テスト 都道府県別ランキング（平均正答率と順位）

トップは今年も秋田 目立つ沖縄の躍進 小学校算数A

2年連続で首位福井 目立つ正答率の改善 中学校数学A

志水宏吉「学力は家庭と学校の力の掛け算」

都内の学力こんなに違う！ 東京都の学力は「東高西低」

これが最強・秋田モデルだ！ 答えはすぐに言わない とことん考える探求型

ルポ 広がる子どもの学力格差と貧困

年々深刻化する子どもの貧困 - 子どもの貧困率（注：17歳以下の貧困率 出所：厚生労働省）

親の経済格差が子どもの学力格差を生んでいる - 世帯収入と学力の関係

（出所：お茶の水女子大研究）

貧困層の子どもは自己肯定感が低い（出所：「大阪子ども調査」結果の概要 阿部彩ほか）

## 3 教育改革の光と影

旗印「教育再生」の内実 アベデューケーションは何を目指す？

鳥飼玖美子「小学校の英語教育は百害あって一利なし」

塾と学校急接近 ベネッセだけじゃない 進学塾が学力アップにあの手この手

塾アレルギーが消えてきた学校 - 中学校校長へのアンケート結果から -

（出所：国立教育政策研究所）

Q学校と塾には協働できる面があると思うか

Q場合によっては、塾や予備校の講師が学校で教えることがあってもよいと思うか

- ・約20項目を点数化 先生の弱点洗い出し（栄光HD×葛飾区立中学校）
- ・模擬授業チェックし 先生に改善策を指南（市進HD×千葉黎明高校）
- ・校内で放課後に塾 保護者の期待大きく（スクールTOMAS×文教大学附属小学校）

全国初 官民一体校が来春始動「花まる学園校」の衝撃（佐賀県武雄市）

「官民一体校」はなぜ必要か 直撃インタビュー

武雄市長「公教育はもう限界だ」

「花まる学習会」代表「メシが食える大人にする」

橋本教育改革の光と影 橋本教育改革は何をもたらしたのか

パソコンを増やせの号令 始まった教育のICT利用 普及阻むカネと教師の事情

タブレットPC導入で学力向上

（出所：熊本県教育庁「ICTを活用した『未来の学校』創造プロジェクト調査結果(速報)」）

パソコンは普及せず - コンピュータ1台当たりの児童・生徒数 - （出所：文部科学省）

文部科学相 下村博文「財務省的発想からの脱却を」

見出しだけを拾ってみました。こんなに内容が“多角的”だとは思いませんでした。経済紙が教育問題を集めると、こうなる・・・ということですね。

この特集の読み取り方も、いろいろあると思います。ぜひ、図書館などでご一読をおすすめします。（橋口）

義母と、娘や孫たちにも

研究報告しちゃいました！

鈴木つや子

これは、研究会参加感想の送信メールに添えられたお便りに書かれていたものです。鈴木さんのご了解を得て、記事にさせていただきました。

お盆に、「通信制・夜間大学による女性教員養成」を一族用に編集して、義母の娘夫婦とその娘、息子（私の夫）、孫夫婦（私の娘夫婦）、ひ孫（私の孫）に配りました。長女から、「くわしく説明して」と要望があったので、6歳から93歳までの聴衆に話しました。（4歳の孫は折り紙に夢中。）

娘たち（義母から言うと孫・・・育てた）から、「給料はどうだったか」とか「なぜ教員を続けなかったのか」「安城まで自転車でどのくらいかかったのか」などと質問がありました。「給料はこの頃は良かった」「子どもが生まれた。預けるところがなかったので、続けられなかった。」「一時間かかった」との返答がありました。本人からは、「詳しすぎる」との感想がありました。

娘は、「〇〇先生」という義母に宛てた文のコピーを配ってくれました。〇〇先生がいかにも、やさしく、きちんとした先生であったかを書いた教え子さんからの文です。その中に、「毎日、弁当の時間に「青い鳥」を読み聞かせてくれた、叱られたあとは、抱きしめてくれた」などと書いてありました。

自分も同じ教員ながら、初任の頃は仕事をこなすのに気を取られ、「読み聞かせ」した経験は少なかったこと、中堅の頃は学校全体の仕事に忙しく、子どもと触れ合うことが少なかったことを反省しました。定年間際になって、小学校に戻り、触れ合う時間が増えたことを思い出しました。毎日が激動でしたが、今思うと楽しかったなと思います。つい昨日、その頃の生徒から、転居通知をもらって、うれしく思いました。

教員になる時にみな、子どもと触れ合いたいと思っても、今のこの時代、それが許されないことが多いのは悲しいことです。おおきなパワーの損失です。

この会では思ったより、みんなの反応がよく、やった甲斐がありました。わたしができる最後の仕事は、先輩方の思いや業績をつたえることだと思い、これから何らかの文を残していきたいと思います。超現代の問題を扱う「調べる会」に、研究を発表できる機会を与えていただきありがとうございました。今後は、娘達世代の子育て支援のために、「定数と教育費」の問題をわかりやすく伝える活動も考えています。